

保育の傑作 「人形のお家」

林 健造

お話の前に

す。それでは残念なので、古い記憶をたどって書いてみます。

私は数え年で九十歳です。十文字学園女子短期大学の学長兼附属幼稚園長の坂元彦太郎先生御逝去の跡、幼稚園長をお引き受けし、満八十歳で退職。現在は画家として展覧会に大作を出品しています。この度、御縁が深く『幼児の教育』の編集部より、菊池ふじの先生の「人形のお家」の思い出話を、とのご要望がありました。このよいお話も、眞実を誰かが後人の為に残していくないと消滅してしまいま

幸運なことに、私を幼児教育界に誘い込んだのは坂元彦太郎先生です。坂元先生は、御自分でもおつしやっていますように、倉橋惣三先生の親友であられたこと。私が、金沢大学助教授から、招かれてお茶の水女子大学児童学科と二年制の幼稚園教員臨時養成課程の講師と、小学校の教諭をしておりました折の校長としておつかえしたこと。十文字学園女子短期大学時代は、私が幼児教育学科の学科長の時、

坂元先生が学長になられたこと。これらの関係で、

絵画、音楽、詩などの芸術に大変造詣の深い先生から、本などに書いていない多くのことを教わりました。

私がお茶の水にお世話になった昭和二十八年は、丁度倉橋先生が御勇退になり、附属幼稚園では、教頭の及川ふみ先生が園長に、教頭は菊池ふじの先生になつておられました。及川先生は姿勢のよい、キッチンとした武家育ち的な立派なお方でしたが、得意のヌリ絵の本の相談などによくひき出されました。

菊池先生は偶然、私と同郷、仙台出身なのです。

私はお茶の水に入った翌日、「あの飯はどこへたのむのですかア！」ときいたら、大橋先生から、「これはお茶の水です。メシなどとおつしやらずにお食事とおつしやつてください」とピシャリ。その前科がありますので、お互に仙台弁で遠慮なく話せる

菊池先生は大助かりでした。

ですから、「人形のお家」のお話も、方言まじりで、心おきなくお伺いしたものです。

このお話の前に、一冊の本の紹介をします。学長

だつた坂元先生が、倉橋先生のこの御本は世にいわれる自由保育・誘導保育など、倉橋先生を知る為に、絶対読んでおくよとにと貸してくださいました。これは園の何かの記念出版で、内容は主に保育の実践記録を、それぞれの担任に頼んで書いてもらつた本だから……と。でも倉橋先生は、『幼稚園保育法真諦』というこの本の「真諦」に少しひつかりがおありのようでした。

また、この本には、菊池・新庄・その外の先生の文が掲載され、教頭の及川ふみ先生は、目次の上のカットを描かれており、編集後記に「特に及川先生にはすばらしいカットを描いて頂きました」とありました。他にも、倉橋先生の随分御苦心なさった姿

が拝察されますよと坂元先生が話しておられたこと
も思い出します。

菊池ふじの先生の保育実践

—菊池ふじの先生から伺つたお話—

倉橋先生が園長時代の後半の方でアメリカに留学されました。造形活動などが、日本では折紙で奴さんをおつたりしており、画用紙も子どもに合わせ、一号（ハガキ版）か二号くらいの小さな紙にクレヨンで絵を描かせていた頃、小筋肉から大筋肉を使い、ダイナミックな絵（幼児だから大筋肉を自由に使えるイーゼルとえのぐを使っての描画）や、ドラム缶や段ボールの空箱で機関車を作つたりする活動を学んで帰国され、提唱された時代。アメリカから親善のお使いとしてお人形さんが送られてきました。そのお人形さんを年長の組である菊池先生の組がお世話をすることになりました。

外国のお人形さんなど大変めずらしい時代ですか
ら、青い眼の大きなお人形にそのクラスのお友達は
大喜び、他のクラスの子も羨ましかったでしょう。
やがて日が経ち、ある日のこと。子どもたちから、「先生、お人形さん一人で何だか寂しそうだ
よ」「かわいそだからお友達つれてきて」「アメリカからお友達つれてきて！」の声に「ほんとうに寂
しそうね。わかった。アメリカからお友達を送つて
もらいましょうね」と園長先生に相談してもうひと
つ送つて頂きました。子どもたちは自分たちの大事
なお友達として言葉をかけたり、抱いたり、おま
ごと遊びの仲間に入れて遊んだり、もうクラスの皆
と離れられないほど仲よしになりました。

当然、お名前も、「こつちはメリーチャン、こつ
ちのお人形さんは、アメリカだからリカちゃんにし
よう」とか、「先生いつも同じお洋服ばかりでかわ
いそう」とか、食べ物のこととか、「アメリカでは

ね、ベッドで寝るんだよ、ベッド作つてやつて
「お布団は」「メリーチャンのお机はどこ?」と、
日に日に子どもたちの活動に活気が出てきました。

皆で画用紙や色紙で作れるものでなく、次第に大きなものを作ることになります。「お人形さんたちのお家がないなんて、かわいそだよ、先生!」と声をあわせて言い出します。ハイハイとその度に菊池先生は何とか間にあわせてきましたが、お家作りとなつてびっくり。どうしようと一晩ほど考え、「子どもたちが要求しているのは、ボール箱や、みかん箱ではないんだ。ちゃんとした大工さんが建てたような家でないと満足しないな!」と考えたが、さて、「自分の力でできるか」「建築の初步から学び基礎をどうする?」「建材をどうして仕入れる?」「工具は?」。

私も仙台の浜近い家に生まれ、お転婆娘などといわれ、よく男の子と犬小屋や、かくれ小屋などを

作つて遊んだことを思い出し、「よし自力でやつてみよう」と決心して、翌日は近くの材木屋に行つて、小割とか板とか、廢材を主に注文してきた。ついでに土台の作り方などもきいてきたり、柱材の切り方などのコツも習つたりして自分でも興奮してきました。さて、皆に「皆の話、わかつたわ、先生作つてみるよ。こまつたらお手伝いしてくれる。でも、危ないことはきをつけてね」などと、相談して始まります。

五歳児は驚くことに先生が真剣だと、魂までりうつるのか、「先生、ぼくも作つてあげる」「あ、ここの、こうするといいよ」とか、驚いたことに一週間くらいして、何とか犬小屋のようなお家ができるのです。

何べんも、釘をうちまちがえて、頭がとび出したり、鋸をひいていて、指先をひつかいて血を出したたり、所々やりなおし、でも(他で)遊んでいる子が

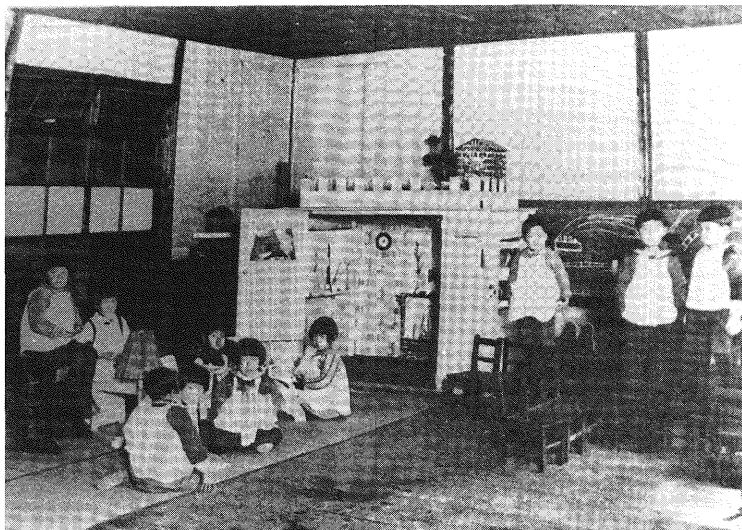
いないくらい、皆で一生懸命やりました。

色塗りは一番おもしろかった。芝居のバツクをかく時の、泥えのぐを主に、あとはニスを上塗りしたりして、ピンクのかわいいお家ができ、「窓枠はミドリにしよう」なんて言い出すので、子どもたちがみんなで塗つて、「先生、みて、みて、カッコイイよ！」なんて大さわぎ。

その夕方帰る時、私はうれしさで、家へ着くまで涙が止まりませんでした。

かわいい子ども、いたいけな子どもが、興味にのればすごい力を發揮しどんどん考える子ども。大人も考えられないような思いつきもでてくるふしげな子たち。これが私のクラスの子たち。

さてそれがきっかけで、人形のお家は、どんどん続くのです。六月頃から、とうとう翌年の卒園近い二月まで続くのです。



▲「人形のお家」

最後はお庭に牧場までてきて、あのかわいいメリーチャンたちは、大牧場持ちまでになつたというお話をでした。

この話を私は菊池先生に直接伺いましたが、その陰には言葉にならない苦心談がたくさんあつたことでしょう。

坂元彥太郎先生は、この「人形のお家」についてこんな話をされています。

一品料理とフルコース

それは丁度、東京駅からどこかへ出かける食堂車の中で向かい合いながら、坂元先生が話されたことです。「この食堂もそうだが料理にはね、一品料理とフルコースがある。一品料理はそれぞれ持ち味があつて楽しい。もう一つはフルコースの料理だ。

ステップから始まり次々と出てきて、最後はフルーツやコーヒーで終わる。フルコースは前の食べ物の味

を受けつきその味を生かしながら次の食べ物へのつながりを重視している心づかいがあるのでおいしく感じられる。保育も同様で、日頃一品型のその時で終わりという形が多いですね。菊池先生の『人形のお家』は保育のフルコース型だ。それを人変うまくおやりになつたところに大きな価値がありますね」と評されたことに、私は大変感動したことを思い出します。

菊池先生と同僚の新庄よし子先生の指導された「旅へ」という保育もまた、このフルコース型のロングランの保育で、見事なもので。新庄先生がある日、東京駅に用事で行った時に見た、客の荷物を運ぶ赤帽の人、切符を売る人、ハサミを入れる人、売店の人々など、楽しい駅の働く人々をテーマに数か月にわたるすばらしい保育となり、この発表もこの倉橋先生のこの本に出ております。